新板
清入

小野篁歌舟

三之巻

特別
へ13
3517
8

特
門へ13
號3517
巻8

昭和二十九年
七月九日
購求

河瀬

小坂宮京狗私

巻之巻

目録

第一　色でありあい孫好おの家宿
のぞくぐくりれいとしぐれなりば
ねぼけ家あんせう柳が面紀ゲル
あくいと考ろいと若恋乃ろけ

第二　笠女像乃拙ハ不異

倩門が恋絲をとくれとそれぬかこつ
の糸はもつれたるもの　倩ぜも
お味方とて浮糸を掛ぬかこ

第三　婚禮ハ恋自害を主帝

仁義ハ武士のこゝろんでそでて
ひめこそ親王乃姉とゝ志ゝ
夏を冥途のぢど出おつり火れ侍

一　色でおりを弥のおれ糸縮

佛説摩訶聖昊經小婆婆を志ゝ婆婆ハ来ゝ海ハそゝぐあと
ふゝゝび蓋ゝゝゝゝぶめゝゝと拙し呉服判皮屋成が遺言ハ波ゝ
おゝゝく閻魔王の堂をいとゝ清水寺ゝゝゝゝ
七月九日小地の笠おきの浦人なるされかゝ
ちぐれ伝ひよされいとゝろく笠ハ蓋地遠彼猴笠がゝゝゝ
おゝもゝゝゝけ安に家もきゝへ蓋ゝゝゝれ
ゝゝゝゝとおりゝく九ゝゝ
ぞりの髪のゝりゝを恋ふゝ名江師ゝ笠男の係をさざ
縁ハ仏二ゝみ堂をゝゝゝひて彩ゝ夫ゝ迎ゝふゝに浮ぐゝひゝ浮中
縁ハ聖衆とゝひゝゝゝゝ蓋ゝゝゝ事をゝのゝゝゝ蓋ゝ恋の蓋ゝ

時の〳〵ぬより舟の桜とはまあけ。西瓜の切売がよろのりみちをてらし。
花の茶見世の暖簾に滝にたる筋ほりゐらび。麻柄のうろくさいおちと家に住せ
とうかんかさぐてう見え系絵。最早一代くの蛍い出目に見へてね奴がかく猫と
鈴ど色一盃に酔けさ弁さとうみててのかうくさと笑り。万金丹でおー
らく〳〵一歩。古ぐ茶屋へ縁取おどりうつけげの者れかうる彩霞の三手仕御居
さ有の前の大太をねんげけてまち古。出ぬ祇園さんとへとう出れた。ぱみぶる
おわ四ぬまつて柳だり出て。遊仁ある町の古手舗へ目とひろーせて行でごんとと
くとうぶ第ど〳〵。おがつかなくも出る人きる酒のうろりとらくへ様の袂きと。
茶屋の扉ふくてうけ名ござせん門をあきさの仕りがみを土中みてひや色。
々ゝとおとどのあそざいひる。おし見けられね寝集まり。さあくでらじまの世。
世上本見世物のぞきもかくくりあり一とうへ大たるが古い趣向てくらーの
お目ねうけまどうへまうこしよりうてーし立商好仕舞よも江を行

よりくそめへ〳〵をあらげうしをつまぎく知らぬ人さはまるて〳〵此の人形が
張文成とし先太ぢりうへ仙人の墓おくのひろささぶふ無意義。仙人の始めが出
てらちく〳〵ひげであちく〳〵ひくら。ちゃんちゃんちゃんてれつく太鼓子
さざせんるいさうさぞ女の方へかうりくざーいまてすと同おかり出る
さとく坂中でふくらかつかうくりのぞけかさ子をあつめてる浮世も今
のさねそぶしらつきもたちよりそへおりしろいおりひつき。仙人の始めが
姿代からまいと弟して後くろれゆくちに古右大系縁つ旅人晒倒大八
ゆうつ何あと笑み朶を志のび。供人もぎらくに寝集みませてそこら
と鉄のなぶいの気絡を見出さんとのとらいくぶひも行めりかうり立まどくが
のざさ師の男がとしくざんか粘ぐ。おまへでさハみすが示と行とろく
あそうしまうするのぞさとりハ子供や女中の見物をあての商売おまへがる
柄るあまりさしくがかくろりさ紀みおちなされてハ。見物衆がおそれてより

くまでまゐらぬと出羽掾とやらで大八コリヤ屹度そのかたちにいづ
あるが小野のたゞむねが浄瑠璃のおゝまへむかふに迄出られたもの像
をとらぐし出来てまいらせて当の傳授けしる浄瑠璃のすゞと
なれぐるめて今宵はむかひの名残。何とそれをてん見せまんぞうとらへれ。
斯人ののぞみをかなへてやらんとそれ出し、与茂あれはいふ〓〓と申すを
おこる様。そのかはり水ず風情が見んとあつてのこうらいの石ちがひ。
いつもくるしみがちで身じやがしらぬ者おかまひし時もありそのお客様と申すは
隠居の殿さまへ屋敷へおいでなされるとらうす。それなされる処の女も浄瑠璃家ともよぶ
よいかいなあのうぎるよりもここの渡世者太夫の観世音浄るり〓
様で見せるのぞきじや一文じやくとあらそひ子べ。綾戸もわつとし色太八
あらばあくらねでよいすをたのむすぐにきよくり口上あらさをせいけ
ふあとしいふるをおたく大八が後を後よりおいかけ浄人出てきたるとは

ちらぬ程で浄瑠璃とあふと不審で下さりながらいつものでまゐ。それ東へあちらのの
出羽が頼みてかうばかりがとむかふにでござる。それもそうよこと当の像ある方へと歩みま
中くのぞきの見物へかうおつきあひがてらにいづ申て小家ふおつけがうと〓
ちかひ色太夫がうしろ当世のうしろからげ様あのづくあざ出されのあ待兼ての娘その
いそよのでんし娘の様を持つておなさる。〓〓がきつとむかふ〓さゝやかれ
おくれしてまづれがにだまれとで・いからずひぱきだくて喜ざまりがてさ
高麗もちふ様の寄席とぎうしのと花ふかげさんさせ。勅をのゆきしまとてと家
もう紀伊国とちぎりの侍さんも法あるそのひかげなくしくも文おくれなり。綾門
羨六形に勝うけれどと見れつかく目でむかへ行過れど。目で見おくり。姉も
見るが程もいつもりが出あってもうそもおもふのみてがりより見とれて深九を
さかうりがうくり性根へうつかりとおいきままとふうよへ出男と見へに〓〓太八
さまかつとんだ太夫様のおかみさまがとて浄瑠璃姉とみのあるとらへ

みくこゝハ君の宿禰おのがうそりもうつりとらり酒でくへさふと。熱に冒され
たゞこゝの悪人よりもかしこき。是へ正肺なへぶろさりとおんゝとおれるとし
あされとらて。綾門眼を角とゝて太王とへぶさとぞ。怜唐の宮子太夫乃
くゝぞゝそれ女くさらぬ綾門よくしとゝて身が悪ハちゝさく宮子の悪へ
広太寺りとても悪人とよおかるゝへぺぞとろぐめ宮子とうやまひ。わう
法くでいゝれもまし。貴が信家令かんぞそてくびとちりとかくうまぜんを
あるかくくみすれねぞやうとうがひ我つまとし。宮子をとらへてなま
天信ふ白まをとかくれ佗の子宮隆ぶり取めれバ出ふもの世ぞサア其の
ありんとらぞてもの事の骨折つる山臣の白ふ叙ほりりとせしと宮を
さし芳りらくくぐさあさりたきうね都に大ハもあきれそ。拘
そもゝとねおりさるを豊のうげより二人のおでこ師ちよろちよ都とさし
出して一めびがしも声の空ねむしがまし大や抱く。あらハ都して

げの内ふそがく子内親もかけく余なのらんが出へこまちうかくに立寄り
後さびしくめゝれバ弥の前おへ幸次の衛かし。おくきド当夫のさぶよふさがる
太夫弟綾門ニもこもさい徳北月さとの手拘かせさこれと。宮子より違
のちかくしめくせし女のり袖お字坂みかのぞせ卸ヒとおやくそへと弥み
女人みとりはけでそをむらいとらもしくれだ立さらげど太宰さすへんひ
うけなぞて。弥のあを中にとりあかびとでにのやうく凡人されバびとろの喉さ
師がしやぜんとおせるそのとりのひとりがとでかてあぢしとら子内。弥のおれ
まへくぬ天女のたもく命ハとゝて佐きてぶふすのハあうねとの頭さらろ
太郎み身をたづけふしかて。綾門はとつて死る者をみなの身中。弟にあなひ
おばおつ付宮居あがきてのおんながらふちゃうさん。さそくぐさてれ
あれみある蛍が像へさゝゆる命中りつて手くてでらてまぢんれ知つて
すそんどとうけあぐると。弥のおの流罪のうへれ流のまくどぞれさんあかり

やごとの〳〵あたてる像すでに霊にけりまことにごうんとかのまうぞく
さめぐとあてる花のよいあとそうせあそこのそれるれんひとさとてとる世と業
にあどいくとそであたるむ〳〵の像ふまとうけみとうとんとでそてられる。

二　菅の像ハ初つる石黒像

右大臣従門ハたぐのてる菅ぜひるく　検断大八のろた菅の像と歩
たとさんと。右大の腰みとりはくとめれとあてとなぎく弾ハ右ハ伯ハ
ゆ〳〵てうどのさどのりはふうらあと菅ととるあふ菅の像ゆとくと
鈴さおあふとのぐてとく〳〵貴命一あーあて探摂さど階あれよど
きとむ〳〵の方二言るあげ付ふれ。どろとむつくとあとあどれが菅の像
面いちどりそうとあ〳〵むの菅いどもびつくりあとれて河も
なく〳〵ちりあとせり。菅さとびゆうれとと〳〵もせんど。博士の皇みた
逆のとそびてそのさざ〳〵と人はもー人ハ博士皇ひそうに法と

遣唐使の私をあ〳〵そひとどとあー菅原の三字家家家
ふいつをゆとさどなくびよ〳〵ふんと判ーさせーも菅ハ子流罪と
あるもお法ばく。検非遣使ハ性英いりとうり味の出義の武士味の像ハ
ひうされく遣原ふばく拙るるあ世りのとちよハあろう弟もまるの友つ
もてろーてちまと空ちのとあ知。ようその拙ハそちの像ちのよハ
拙ふどろうあくあであ〳〵ふどや。空ちの悪とれりて。あ〳〵ー。罷て家に
と宮ふうれどもうとの四義楽ふくーて。ばどでひとあ〳〵あさ世と
拙宣ハのあづ〳〵のとぬ拙ハみて味せよとありさ勅ハ弟をかて。ぬー
〳〵ふあく勅ていりあと。ぬ不の考れ下みハ空とりて人もとろく拙
にちーく。接ととんてつり。ちもりくの附てれを接くと実てとれと拙
ぬてと住接ふちーあ〳〵せ。空とといれちに住接あるく生く新の
ありさ角。空ちの保利ちくあるとといくど。ぬ義ハ邪延の四大の四人

つまにさへはなれし上にふびんや中にや孫をしとやがて愛をとゞむり
さてもおく来るさよふそなかへしみ家くのうや名のるくあんど
させんとおかず百の翁の女郎くるしみや女に肌をゆるさず狐日乃
雅楽とあしをさげる今日まで志のびるにぞふべくあんぐさしてぬふり
てぞがつまさとうからかはつくも夜ぜんせ出し夜結あくさ面とぶり
本像あかつり出されりぞのくへ宮子柏まででとうしろがれくる
のぞくあるとハかぐりも五郎大夫人サア百年めじや。さいそのたる
意もくあつる奥にしてくれんやりとの上そのいさらひ威あって武
将ぞこそるなれ綾門殿角抱まいらせそ。弥三さんへい身ハ本望い
弟ござけ起て待花の抱かげとかふ味かさあげ浮世ゆんとさるかみ。
のぞきかくりの与惣三九やうとおての入り抱れ様のあそびきまつりとえ。
よりはく出るつけとげく弥三郎のまへをいでしきいそごしろふ出て

さぐく頭巾ちぶり久しくござりて綾門殿の思ひをのきるひで毒薬
下され紀のる其門のまきれ友綱登都居にしてさぐひ掛もみくろうて
円とひてしてとらんでのそるひとりもてとうちて大きうひつきびん対面
唐冠筒袖の異国出立とぞ。今のいとびんでハおかみ見えとれもおくいり
ぞや搭はこ宮子の石敷へ唐の太后れ役とうろうり義経さハ宮子柏の
思ござりくも周全なんれバ悪ふ此わりめしたくねる苑ぞの御ふ御後
悔ない知り申る計略子宝のひおも柏あれハ先おつかきての黄金の分
ちろくさうちをおかり名さるを正門さセんと。登綱居の御下知のよりて
家来丸をに下去にさて用意金の極をとりてつくまよう勘定男。本名た
顔上無羅とて家祝人のかり代良見志くあとも登まうりきしたるか。
いつの御能を今日ハあのく先へと気しれよりぞあんとも登綱居とんと
あくせて此仕合せ。すくやのびしね自殺くさやようつるよせ。上かへ登世サア

親類と申さんねいつさかひさしもの後家ハ大八もお情に顔おかり
たのもしく思ひ侍どもいひつけわひ小前たまらじみげんとさらそとす
てよりある侍あまたあつしあてそおけど門をみて二人もおへへなかつね也様
よりとまる獄園をひしくかとおまれむいつまもしく白様へ普様の味方
いつしませうぞそのおつしめへ後門ももしも大八もくらし九へおつとくし
なされバおとあてすらとろし二人白紀機みかてますせうぞいのうらと
たとけれざりとなく様がすぞ禁止するぞ縁のまんへいわしさすすぞび
つまんおつかすも皆もでてあひとうけおへやしさもいひくしなぐいしさ
のぞけりまするとそぶしくしとのびおりりく情まのさすずる親とみへて
そへいのみやうてむや義おへべさありやさんとなもさうれ若おつ天八
りえやのざもれあとおさへ人後門のおぞんを見てつさらど立てお(?)く
てさしぞくやきからぞ天命あつさへの家れつさぞひさ　れよいへ

うさくびめてたふさしさ日はんぐんてそしられてかれ付し大郎へ
まさうしに対うち紀あまりあへぞ今後をおすそんのいて見けて両方
びおん一家のおそにいかそのしほされよびいるしむかふアとれバ堂都居臣
よりとそのぶよつく大八がよく勝つきうけとれ右と弐人が中へおなけ
のへぞ友列弁庭中にうけれ左右よりかさすく立上りて天命知ぐ
の不忠とのよくもまれねがいよりハ忠臣しおのその天命知られずみぐなぜ現在
のまへ人をたらしてお顔を尊するハ何事ぞさこうとおつみれどもたとけ
おいて夜日の見さしあつつへべき役用もあれひとこす縄かくてしおぞ。
女のり物みずからをサアいのちがおしくバ候どもたれとうへて身元物が
わくなへきうるべしとるのさとおべ。めしきのお人目もうつれつけおかれて。
たらむくれひとしいぞれつさぞ立しさつきねさしまうすめぐさりも添り
くれおの普も間くとらくし帰てきやんぞのその君へ苦がさせれおつつ

あつかれてたるものつゝ。ぜんあくの人やちんぞう猛獣五道の
冥官のゝせる人寺にてれいぶつよく世をこのゆゑと正さんぶつ人あつて
ぜつぐぜせよ出てとらんすべ冥途よりかりにきつとゝ仏へて財宝を
まつべし。稲穂の銭へおく。ゆゝしよとおのねうごりを神のあつく
まつれ出家へ物をそ不動の答へ一さん冥途へあもむきーづゝ。ごう
しのぐらりぺくみたくして祈るなり。

三 婚礼の意自害ハ之常

小姓の堂嫁せして在大弁殿門を渡ることゝ法もあるべ
出家出家くゝ聞くるとの風俗新の人はにの陽ふとろまりとれて
惟大臣はの家聖ぺひそふ寺院祝言をつゝ鎧み祈しまいて也。
相ぐりてみーなりしうへ管院よりぐさろ付一首のうをさーとを
その宮に和田の系やそし後けてちざ出ねとへあれ常よあまれつりあ

とのさ対てのガーぷへ人ぶ。なぐさんろうとつげよ。それハ新へくろのつり
物談のせんぐさとのれとゝ。ぐさんとの子のんとぴるぐれんのんぐ亜ー
ぷへ今やのりるとまろ出ぷ。ぐるぐ亜ひそふ市とんもろーあるせー
ふ細ある中へこれよりたぷ。ひよりあるせぷ。ぐるのの月のこれ罪ハ
おらいりのろねやうにとさんぐくとにてーふぷ。あぜん方とりーあるて。
大大系後門を答ぐちろきーぷへ物のれるーぷ。ぐれハ宮子系も
ぐまろーぐ。ぐろの新へせるのガりあるんハ後あのけーり。祝言を人貴う
ぐーくくーこうすと今ろこぐ。ぐいまなり。日ぐろこぐんあるーまん宮子系
ぐのあれてるもたよせ亜ーろ。ぷこやぐくさせりさんとねんぐろて後ー
まんぷ。訳を出盛ろくもちーぐ。今あこーぐんね亜肥のお伝いろお世にては
ぐんとと。後の四ハ次のろよりもーるもと出けるあれてるぐ。音用とんろう
ぐーろうて。ぐろも目のこうるとくさんとして。後とろうるぐくるれハ祝言まよ

四ゆびをとりてもゆてあ[illegible]ん[illegible]て[illegible]くてゆるゆるひとりてたもれ
ちうぶのとてそれをとあそ〳〵ゆ目をとりてとへとりたてるぞと仕をれば。
みれてるゆをとつくへあそれをぞ〳〵親王様あけてとて親人のをんなりもあへ
をありそのお成奥へも出へあそこをゆんだりもう奥方みーきのまへ
方までいつのふまいり所ゆつをぬのびまりぶとぞをんをあ。意をだ
るとといふへ大てゆ。あをなう四成のをびだをちひをすれぬんのをぶんものだ
あをのるせろみさもをるいとひをきいといふぶんゆをのをとりてもおろゆんだと
をれ四分のをんゆぶいををんとんかりへどゆぶんろをびぶをちひをうるゆへ。
ゆんまへおゆむまへとの心親ぞ。ゆ奥ゆへも目ゆるいとりてゆをぞれをんぬ
といふてゆのをちへせるへもうをうをといてするもゆよをん親王様をんををんぬ
をんへゆみのををへ牧乃まゆををとゆんゆる目をとあをゆだーをうをゆんをうをゆへ
ゆをんへ行ゆを乱ゆるまでのあををうをとゆをひをうをーのひありてゆをるをを

心のうれしさ。ありでよりも。[illegible]
感心まーくそれかをいをあをれば。[illegible]
てゆうをぬれ張後ゆーゆ。ゆ帯。をとりのく嘗。大をうをぎをゆを
ゆをふゆみれてゆれをせをんゆ。をれの姫君をとゆをさせゆれへ
ゆをうてのゆ法をうりの四弟とをとをくゆりをゆ。親王もゆをのんゆをくゆ。を元
あげゆのひをでをく行ゆひをさゆゆる王へ親王の弟今神山主葛元奥方弟上
とゆ被家。それをうをへゆをくゆをゆよゆ。を葛元僧て毎れ。そをへゆ成ゆ[illegible]
をいをくゆりゆをるゆふ。葛元の執拗奇字大伝主姫とゆをいをくゆ。今
姫ゆれてゆをと祖[illegible]へゆをるをゆいをなをゆをとをもをゆ目伝葛へゆ目をと
をゆへをゆををとゆをををゆ。ゆをゆへゆをゆをゆをゆ親王様
とゆへをゆををとゆをををゆ。ゆをゆへゆをゆをゆをゆ
をゆをゆ。ゆをゆへゆをゆをゆをゆ。ゆをゆへゆをゆをゆ目のゆへねとゆへんの目を

うぐひすの羽にて作りたるなり。親王殿へ参らせ給へ。
ちゝのもとさゝやかにうつくしきを。扇へ入れ給へ。
すゑとゞめ給へ。ひるのあつさにそのちゝへ親王殿のおまへ
にあさのうちにさゝやかにうつくしきを。おどろく姫のちゝ
親王もいとをかしさ。あやかりたまへ。
ちゝにこれもうつくしき。とぞ。
ちゝうつくしの。姫のうつくしさ。
のあつかひ。
今ゝ殿へ参らせ給へ。まづ参れのこゝろ。親王殿へあげ給へ。
あのひとゝもあげ給へ。細さ一色とぞ。びんのうちの。
あそびにて。岩ぬ。姫とくるもあそ。
やどりさやうそへとぞうてんあるに親王もいとゝなるひとり。

長谷のくぐんの一色上壇の床にはやまひるとぞ。ふた殿あれば先帝
淳和天皇の御時の御堂の一巻の巻物の一巻の巻物の長谷初瀬
の御堂に籠り。近く宮中に人々さる人へ。おぼえて。
さぐりもとむる。宮中。さて。ぬぐ。
サノその一巻の巻に。姫親王殿へあげ給へ。
イヤその細をみあけて。上巻イヤ。
たねとつあうけ給へて。女房のさ。
とつさにたつる。大殿の月ね新ぐ。
四月宮とぞ。ぬぐ。
大殿も親王殿。ゆとあ。
ゆとぞ。ぬ。
先帝人。

ふうさとひしょう。信濃の張ハたりしまおり。女婿の弟にそ浮生信の
宮みとうもびき倒もなく。世のきらくとおがみ三ケ月とつめぐりね間
ひそうにおいて面白さしくぞ。その方ごうにこのゆく点れさあふさ心をとりに
をく白たつれそよまのあくるべ人ゆかくとんあをしことぞもてき
みとのう。弟れとうべる貧人に大仏くとうろいりしぞのあちぐりにうち
あくしてだのうけ・こくしりぐ。おそれあるこ上のぞくぐぞで兼暗しなん
と。宮殿の分祀ぞんぞのみれ矢村ぶもうくぞ。ぞぬとりふ名ぐりあく
第酒とうねたぐひのをぐ弟そのはあのみと安産をしあれてると何しも
常をうねをとんぞのあんじつをくしん公でのぞ。ぞでりりつふ海ふいとし
がやう。信長の姫とうぐせそぐうるんのをくしぞ親王様へ立とりすりくえん
とぐりてきぞぐこうかぞ。ぞぐとりんねに月くうのそのあれ長男とりく
りとちろしをでもんんがりとんねをひとをさく音のとりを立ちうあと

うみくうもけるぐにてもひくてせーにぞ。ぞとりくをろ四こうんきへの五ぞす
あぐをくれねとりうをけをそ兄を天姫妹四姫とりうをけ。ぞとそよあんくよ
かるくぐりくすうとりのをぐりとうをとのりぞくねいるぐびいんぐそれく
勅が対していうけ。自宅にあるしの色あるんと。声もるひてあられるぞくてび陰ぐく
姫のんぞのとせんとせるしくぞ。分祀とるていみんせくぞこのおるる祝りぐとり。
東ふのんどんつをうるんぐぞくうるんぐいつをうるんおいつをうまりてせ。あれもおやまれ
中んのをろ八親王様ぐりくやをうんとをくうの五ぞりとねをこのをりくとあるるや。
とぞをしのどんあくうるんぐだ。だれもとでめうひ。天姫をもちくねとてぐり
る紀四孫を組をを三宝あるうるてぐるを宝のをふるる祝をやをとぐ。
やどをるるをみれてる姫ぞんすいくのめくくれる。ぞのあれ人ね世の死出れ
くびぞ。ねくんるるりをみくくぐ紀をあいをぐる迎も祝りくを陽ぞ。ぞとく
みくどの四姫ともをぐてられるくい大仏姫。新をる祝を姫を帰世んくをと

いつもうりて酒をうるね雪若八若さかりくもりはてぬ
ぶらりぶらりのく行んとすとてしぐぶ〳〵めひて六意の
のりもそぐ酒くんの酒うりぶとうくんねとして茶碗ある
をへ〳〵にまぶ
をまりぶらりとうくいかおとさち祈りわさ〳〵ちるくんぶ
あの一生をさて〳〵のうれとしてよもとひ方世のぶあつてかをさく
結とんと。樂の一生をさてさられぶかいて夜〳〵ちうち消ろてかをぶり〳〵
酒と一夜にうとなくぶうとれなちづきて親をも亦衣の四絶四新にかり〳〵
あて。奥ふくの一生をが新苦の世れをくひぶれわぶられうき紅をたぶよ
月をぶかの者くぶうふつきんとふうれ乱殺法ふかうもる化城喫品
おとさるうまうきの四ふ浄をふいてるべ〳〵たをけ行〳〵をうれのひぶ
おうりふのうげのふくぶもゆきにさうきう

三之巻終